
月世界遠足

吉野真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月世界遠足

【Nコード】

N0955P

【作者名】

吉野真人

【あらすじ】

なぜか月の残骸がある町。月の残骸へとハイキングに誘う彼女。

紫色の夕焼けが空を覆っている。体育の授業が終わった後、俺は屋上にあがった。

夕暮れ時の質量の軽い風が吹き抜けていく。

「やあ、お疲れ」

金網にもたれて夕空を見つめていた彼女が振り返る。

「また、サボりか。いい気なもんだ」

「上から見てたよ。栗鼠みたいに走り回っていたねえ」

彼女は嘲けるような笑みを浮かべた。

「たまには出るよ」

「いやなこった」

彼女は一度も体育の授業に出ていなかった。彼女が落第することには有り得ない。この地方都市を牛耳る大財閥一家の末娘だから、何でも我侭放題で通った。制服だって男子のブレザーを勝手に着ている。

俺は彼女の横に並んで、柵にもたれた。

高校の屋上からは月がよく見えた。岩石の塊。巨大な卵の殻のようにも見える。

ここから10kmも離れていない都市のはずれに月、正確にいうと月の破片が大地に突き刺さっていた。昔、月は星や太陽のように宙に浮いていたらしい。隕石の衝突で地上に落ちてきたとか、大昔の戦争で壊されたとか、色々な話があるが、本当のことは誰も知らない。月は夜になり、星達が夜空に瞬くとぼんやりと青白く光った。

俺が月を眺めていると彼女が不意に、声をかけた。

「ねえ、明日、ピクニックに行かない？」

「学校がある」

「んなものさぼっちまえよ」

「あのなあ」

それもいいような気がした。どうせ、明日も今日と同じなんだろう。彼女の誘いに応ずるのもまた、面白いかもしれない。俺は少し考えるそぶりをしてから答えた。

「わかった。行こう」

「本当？　じゃあさ、他に何人が誘ってよ。女の子がいい」

彼女は無責任にそう言うと、楽しげに笑った。

俺は肝心なことを聞き忘れていた。

「ちよつとまった！どこいくのさ」

「月だよ。じゃあね」

彼女は身を翻して、さつさと階段を駆け下りていく。

翌朝、俺と彼女は、待ち合わせ場所の橋で落ち合った。昨晚、3人の女の子に電話をかけたが、結局誰もこなかった。中学からの同級生には、冗談じゃない学校があるわと言われ、同じ委員会の女の子は、釣り堀に行く予定があるから駄目で、隣の席の女の子は、彼女に言い寄られたからイヤだというつれない返事だった。

「君に期待したのが間違いだったよ」

彼女は憮然とした表情で、そう言い放った。結局、二人でいくことになった。彼女は、釣りに行くようなポケットのたくさんある黒いジャケットに、独逸軍降下猟兵の迷彩ズボンという服装だった。スニーカーではなく、登山靴を履き、昼食を詰めたバスケットを持っていた。ちなみに俺はいつものよれたブレザーだ。昼食は彼女の担当だった。勿論、自分でつくったわけがない。屋敷の料理人に命じて作らせたものだろう。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

空はよく晴れており、少し登っただけで汗ばむような陽気だった。月の表面は、ざらざらとして灰色の岩石が目の前を埋め尽くしていた。所々、クレーターが丸い穴を開けている。クレーターは実に様

々なものがあつた。大きいものなら、ちょっとした円形ステージにもなりそうだったし、小さいものは、下手に落ちたらすっぽりとはまりこんで足をくじきかねない。一回の休憩をはさみ、1時間くらいで頂上についた。頂上からは模型のような街が見えた。頂上につくと彼女は大きく伸びをして、街を見下ろす。

「まるで、ゴミみたいな街だね」

彼女はものを放り投げるような口調で言い放ち、シートを敷いて座った。

俺は彼女の不穏当な発言には答えず思った。この月はいつから、ここにあつたのだろうか？ 子供の時はなかったような気がする。気のせいなのか？ そう、母親に手を引かれて、スーパーマーケットから帰る夕暮れの街に巨大な月の破片は、本当に影を落としていたのだろうか。

「さあ、お昼にしようか」

彼女はそういうと、バスケットから包みを取り出した。中身はサンドウィッチだった。

ローストビーフとクレソン、スモークサモンとタマネギのサンドウィッチ。飲み物は魔法瓶に入れた甘い紅茶。俺と彼女は早速、サンドウィッチを頬張った。ひどく旨かった。さすが、財閥一家のお抱えコックがつくただけある。彼女は、この他、血の滴るようなローストビーフのサンドウィッチがお気に入りらしく、俺より一つ多く食べた。デザートには林檎があつた。

「僕、こういうのは苦手なんだよね。皮向いてよ」

「不器用な奴、仕方がねえな」

俺は多少の優越感にひたりながら、林檎の皮を剥く。こういうのは得意だ。

昼食を終えたあと、ゴロリと横になる。背中にひんやりとした月の感触を感じる。

寝転がって、俺達は下らない話に興じた。学校のこと、友人の噂話、俺が彼女にインチキ麻雀で檻褸負けしたことを話すと、彼女は

なにかおかしいのか、大笑いしていた。彼女は、巨大なアンモナイトの化石を買ったことを得意げに話した。彼女の屋敷付属の博物館の中央ホールに飾ったという。

「今度見に来いよ。半端なくでつかいんだから」
どうやら自慢したくて仕方がないようだった。

無駄話をしているうちに、太陽は西に傾きながらオレンジの光を放ち、風が冷たさを増していく。空の色は薄い董色になっていた。俺は彼女に声をかける。

「そろそろ帰ろうか。暗くなっちゃう」

「実はさ、この月、偽物なんだ」

彼女は、唐突に呟いた。

「僕の祖父の代から、僕たちの財閥は延々と月の残骸を作ってきた。建築廃材をコンクリートで固めてね。ぼんやり光るのも、ただ蛍光塗料を混ぜてあるだけなんだ」

「じゃ、本物の月は……どこにあるんだ？」

「わからない。ひょっとすると、月なんて元から無かったのかも」

「そうか……俺もそんな気がしていたんだ。子供の時から、月なんて本当は無かったように思えたから。でも、なんで、そんなことをしたんだ。一々、偽物の月をつくるなんて」

「偽物でも、無いと心配なのかもね」

彼女は珍しく考えあぐねるような表情をしていた。俺は彼女の方を見つめた。ぼんやり光りはじめた月の燐光が、彼女の身体を浮き立たせている。月の光を下から浴びている彼女は、いつになく綺麗に見えた。

「さっ、かえろうよ」

彼女は迷彩ズボンについた埃を払った。

「あゝっ！」

その途端、素っ頓狂な声があたりに響いた。
靴の紐を結び直し、立ち上がりかけていた俺は思わず、転びそう

になった。

「ど、どうしたんだよ。いきなり」

「明日さ、兄貴のパーティーがあるんだよ。それも格式張った公式の奴。明日はドレス着なくちゃいけないんだ。この僕がだぜ？ あんなヒラヒラして足の寒い格好、やってられないよ。馬鹿馬鹿しい。あゝあ。嫌だなあ」

延々と続く彼女の愚痴をBGMに俺達は月を降りる。偽の月は、そんな俺達の足下を青白く照らしていた。

（後書き）

僕っ娘です。以上でも以下でもない。オチがないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955p/>

月世界遠足

2011年2月13日14時40分発行